

3-2 教育・学修機能の高度化等に関する情報システムの研究、推進 ＜事業計画＞

中央教育審議会の「学士課程答申」で学生自身が学修成果の達成状況を自己点検・評価を行い、振り返りを通じて自律的な学修を創り出す学修ポートフォリオの導入と活用を提言していることに鑑み、学修ポートフォリオに求められる機能・役割を整理し、情報システムとしての学修ポートフォリオの構築・運用に伴う留意点及び課題について、年次計画で研究する。

＜事業の実施結果＞

「大学情報システム研究委員会」を継続設置し、学修ポートフォリオについて研究を開いた。

大学情報システム研究委員会

平成25年9月28日、11月30日、平成26年1月21日、3月3日に平均9名が出席して、4回開催した。

（1）学修ポートフォリオ研究の意義

教育・学修機能の高度化等に関する情報システムの研究では、システム的な内容より教育の質的転換を達成するための学修支援システムの問題を扱う必要があると判断し、文部科学省中央教育審議会の「学士力課程答申」で学修ポートフォリオの必要性が指摘されていることに鑑み、学修成果の達成状況を点検・評価する手段としてのポートフォリオの機能・役割、活用の方法、理解の普及対策などを整理し、学修支援のためのeポートフォリオの構築運用に伴う留意点、課題を年次計画で研究することにした。

平成25年度は、学修ポートフォリオをめぐる状況についての認識の共有を中心に、期待される効果や考えておくべき課題について大まかな視点を紹介することにした。

（2）学修ポートフォリオに対する共通理解

学修ポートフォリオを理解するため、先行して導入している大阪府立大学や金沢工業大学等の事例を踏まえて、課題の洗い出しを行いながら以下の点について共通理解を深めた。

- ① 学修ポートフォリオのイメージについては、学びと教育の向かう方向性を確認する羅針盤の役割で教育改善の万能薬になることではない。あくまでもツールであっていかにかに使うかということが重要で、学修活動、就職活動などの使い方によっては効果が違ってくる。それを把握するにはIR（大学機関調査）との関係の中で客観的なデータとして蓄積・分析され、大学にとって教育プログラムの有効性を測るツールとなる。
- ② 学修ポートフォリオの意義としては、学生には学びの振り返りを通じて主体的に学修の目標を設定させて発展的な学びを促すツールとして、教員には学修行動を客観化することで授業の点検・評価を行い課題を発見するツールとして、大学には教育プログラムの効果を明確化して教学マネジメントの見直しを働きかけるツールとして多面的なミッションに機能することとした。
- ③ 導入及び利活用に伴う問題点としては、次のようなことが指摘されている。
 - * 学生にとってどのようなメリットがあるのか理解されていないので、学修状況の書

き込みが継続しない。

- * 学修の振り返りを記録・蓄積して、効果的な学修方法を身につけようとしなない。
- * 教員自身に興味がなく、学生に学修ポートフォリオの活用を理解させられない。
- * 学生の学修行動、学修状況の把握にどのように活用すべきかわからない。
- * 学修到達度を自己点検・評価できるよう「・・ができる」など書き込みの例示や振り返りシートがない。
- * 授業改善に対する教員の意識が希薄で学修ポートフォリオに関心がない。
- * 教員から学生一人ひとりの学修状況にコメント、フィードバックしない。
- * 教員の自主性だけに頼らない組織的な取り組みが必要
- * 活用を促進するための全学的な仕組みと体制ができていない
- * 継続的にシステムを運営するための財政基盤、情報環境、人的組織がない。
- * I Rのための定性的データとしての活用ができていない。

(3) 学修ポートフォリオの課題

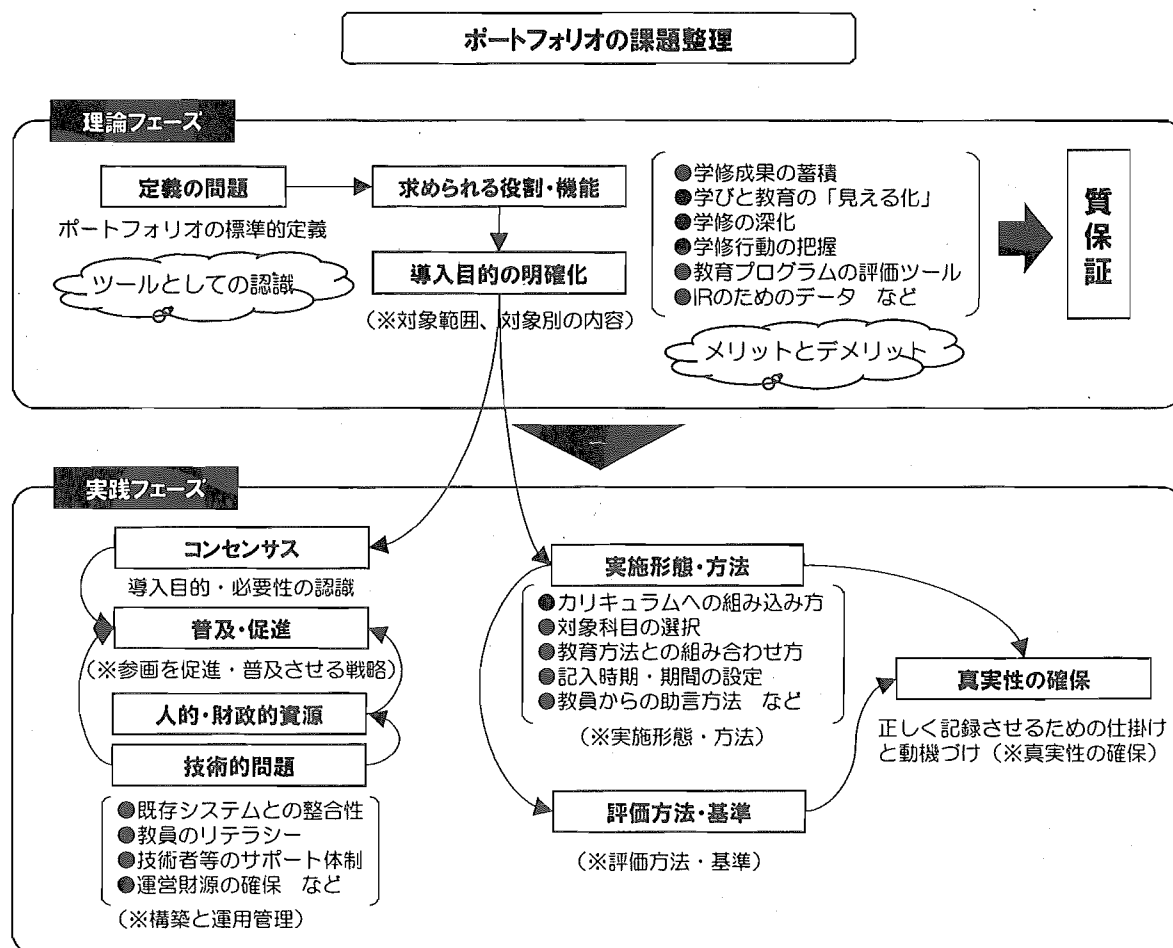
以上の現状の問題点から、以下のように課題の洗い出しを行った。

- ① 学修ポートフォリオの役割・機能について、学生・教員・大学にとってどのような意味があるのか、平易な言葉や例示などの工夫が必要となる。
- ② 全学的に展開するために学長を中心とした強いリーダーシップが求められる。
- ③ 学生一人ひとりの学修を全学的に支援できるようにするため、教員間の連携、教職員間の連携の仕組み及び体制を早急に整備することが求められる。
- ④ 学修到達度を測る客観的な指標、リストを考える必要がある。例えば、グループ学修での到達度の点検・評価をどのように行うべきか。
- ⑤ 導入を効果的に行うための手順について、全学的に実施する教養科目、共通科目などから始めるなど実施方法を決定しておく必要がある。
- ⑥ 学修成果物の内容の設定と蓄積する情報量の設定及び掲載方法などシステムの運用環境の維持管理を構築しておく必要がある。
- ⑦ システムの運営に携わる技術員の養成と確保、運営財源の確保が必要である。
- ⑧ I Rのデータと連動するようにeポートフォリオを設定する必要がある。
- ⑨ 学修ポートフォリオに記載する成果物の真実性を確保するための仕掛けとして、真実を記載することで学生の学びの不安が解消され、卒業までに個人指導が受けられるなどの全学的仕組みを構築することが不可欠である。
- ⑩ 学修ポートフォリオの参画を促進・普及させるための戦略として、学生にキャリア形成の一環として有益であることをどのように実感させるかなど対策を考えておく必要がある。

以上から、学修ポートフォリオの課題について整理した結果、ツールとしての認識の徹底を図るための「標準的な定義の明確化」、「求められる役割・機能の共通理解の形成」、対象範囲・対象内容による「導入目的の明確化」、「対象科目の選択、教育方法との組み合わせ方などの実施形態・方法に問題」、「評価方法・基準の問題」、「正しく記録させるための仕掛けと動機づけによる真実性の確保」、「コンセンサスの形成」、「参画を促進・普及させる戦略」、「人的・財政的資源の問題」、「既存システムとの整合性など技術的問題」など

検討すべき課題がある。

これらの関係を図示すると次の通りである。



(4) 中間まとめの作成

学修ポートフォリオの導入が教育の質的転換のツールとして急がれることから、委員会としては、導入に当たり留意すべき基本的な事項について情報提供するため、以下のように「学修ポートフォリオに対する理解の促進に向けて」として中間まとめのとりまとめを行い、次頁に大学の教学ガバナンス関係者及び関係教職員に報告することにした。しかし、今回の情報提供だけで十分理解が得られないと考え、今後、Q & A、導入事例集を作成することになっている。

以下に平成25年度の中間まとめを報告する。

学修ポートフォリオに対する理解の促進に向けて
(中間まとめ)

1. 学修ポートフォリオをめぐる状況

(1) 背景

中央教育審議会の「学士課程答申」では、卒業認定における評価の厳格化を大きな課題としている。評価の厳格化は卒業時点に限定することなく、入学してからの教育過程の成績評価について学生の成長という観点から考えることが重要であるとし、教員間の共通理解の下で組織的に学修の評価に当たっていくことが強く求められている。評価に当たっては、多様な学修活動の成果を評価する観点から、学生の学修履歴などの記録と自己管理のための仕組みを整備することが不可欠であるとしている。その上で、学修成果の効果的な達成を促す仕組みとして、学生自身が学修の達成状況を点検し、振り返りを通じて自律的に学修する習慣を身につける学修ポートフォリオの導入と、大学がこの情報を踏まえてきめ細かな履修指導や学修支援の実施に活用することを提言している。また、平成24年8月の中央教育審議会答申（「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」）においても、速やかに取り組むことが求められる課題として、学修ポートフォリオなどの導入が指摘されている。このような、教育の質的転換に向けた改革努力について、国は平成29年度までの「大学改革実行プラン」の中で、改革方策の実現に向けた取り組みを大学に求めている。

(2) 学修ポートフォリオ導入の現状

学修ポートフォリオを導入している大学の多くは、その目的や意義について、十分に学生・教職員の理解が得られていないこともあり、期待した以上には教育改善の成果がみられていない。

以下に、大学組織・教職員・学生における主な問題点を挙げる。

【学生の問題点】

- ・ ポートフォリオの意義・目的及びメリットが理解されていない。
- ・ 効果的な学修方法を身につけようとしない。
- ・ 学修状況の書き込みを継続しない。

【教職員の問題点】

- ・ 学生にポートフォリオのメリットを理解させられない。
- ・ 教育プログラムの評価に反映する方法がわからない。
- ・ 学生の評価にポートフォリオをどのように活用すべきかわからない。
- ・ 学生の記録や自己評価にフィードバックをしない、コメントの仕方がわからない。

【大学組織での問題点】

- ・ 導入目的や意義が組織として十分に認識・共有されていない。
- ・ 組織的に活用する体制が確立されていない。
- ・ 活用を促進するための仕組みがない。
- ・ 継続的に運営するための財政的基盤・設備・人的資源がない。

以上、問題点を整理すると、大学全体としてポートフォリオの意義・目的及びメリットが理解されていない、学修成果の書き込みが継続されず期待した以上には効果的な学修方法が身につけていない、ポートフォリオに記載した学修内容の真实性を教員が判断することが困難、教育改善を図るための基礎資料としてポートフォリオをどのように活用すべきかわからないなどの問題がある。そして、財政的支援、設備の整備、人的資源の配置等の不足は多くの大学に共通している。

2. 学修ポートフォリオに関する基本的な考え方

【学修者中心の学修ポートフォリオ】

学修ポートフォリオは、学生自身が学びのプロセスや成果を示す資料・コンテンツ等を継続的に蓄積したものである。学生は、継続的かつ定期的に学びを振り返ることを通じて学修の到達度を確認し、取り組むべき課題を発見することができる。また、教員から個別指導を受けることで適切な学修支援を獲得して学びを深化させ、さまざまな知識

と技能を自主的に修得することができる。このような学修の体験を繰り返すことで、生涯に亘り身につけるべきキャリア「能力」を形成することができる。

【教員・大学からみた学修ポートフォリオ】

学修ポートフォリオを活用することで、学びと教育のプロセスを「見える化」し、そのプロセスを学生と共有することができ、学生の学修行動を把握できる。教員は、学修行動の記録を活用して授業の点検・評価を行うことで、課題を発見するツールとして活用できる。また、大学では教育プログラムの効果を明確化し、教学マネジメントを点検するIR（大学機関調査）ツールとして多面的に活用できる。

以上のことから、学修ポートフォリオを継続的に活用することを通じて、学生の学修と大学の教育をマッチングすることにより、学士課程教育で求める方向性を確認する「羅針盤」としての役割が期待されている。

3. 提言

学修ポートフォリオの導入に当たり留意すべき点としては、学生一人ひとりの学修内容及び学修達成状況を常時把握し、特に達成が思わしくない学生には大学として卒業するまで適切な学修支援が得られるよう、何らかの個別指導を行う仕組みを整備しておくことで学生が安心して学びに向き合えるようにすることが、最も重要なことである。

そのためには、各大学でポートフォリオ導入の目的及び意義を明確化するとともに、学生・教職員への共通理解の徹底が不可欠で、当面、以下に掲げるような課題及び対応の検討が必要となろう。

- ① 学修ポートフォリオの運用に当たっては、教育課程や各科目において学修ポートフォリオの位置づけや活用方法を明確にするとともに、学生に利用のメリットを明確に提示する必要がある。
- ② 学生に継続的に利用させる仕掛けとして、各科目のシラバスに学修ポートフォリオの活用方法を明記し、評価項目の一つに学修ポートフォリオの活用状況を加えるなどの方策が考えられる。
- ③ 学生に積極的に利用させるためには、学修記録の内容や振り返りに対する教員のコメントなどのフィードバックが不可欠である。コメントの具体的な方法やノウハウについては、FDの課題としてとりあげる必要がある。
- ④ 学修ポートフォリオの導入及び利活用には、学長のリーダーシップのもと全学的かつ組織的に取り組むことが求められる。また、大学組織として学生を支援するためには一人ひとりの学生の学修に寄り添う覚悟が求められていることから、教員の意識変革を促す努力が必要とされる。
- ⑤ 学修ポートフォリオの実現・維持には、人的資源の配置、施設設備、財政的支援等の適正化に関して理事会を中心とした組織での共通認識と意思決定が必要である。